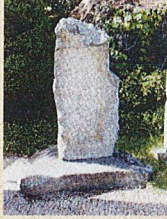


松尾芭蕉

1644(寛永21)年~1694(元禄7)年
俳人 伊賀上野(三重県)出身
蕉風俳諧を確立して俳聖と称され、日本各地を旅
して紀行文や俳文を残す
『奥の細道』『野ざらし紀行』など

1 芭蕉句碑

片平町前田 明治37年
「桜かりきとくや日々に五里六里」



2

2 芭蕉句碑

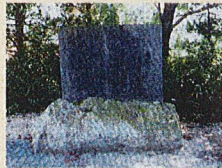
安積町笹川(天性寺) 天保10年
「まゆはきを面影にして紅の花」

被川光義

1904(明治37)年~1929(昭和4)年
詩人 郡山出身
詩誌「北方詩人」によって昭和の現代詩人たちと
密接な交流を持ったが、25歳で病没
詩集『暮春賦』

3 被川光義詩碑

安積町牛庭四丁目(安積公民館牛庭分館) 昭和40年
石「ほうほうとべんべんくさの 生いしけつてい…」
(詩集『暮春賦』より)

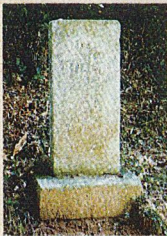


3

采女伝説関連

4 万葉歌碑

片平町(山ノ井公園) 文化2年
「安積山影さへ見ゆる山の井の 浅き心を我が思はなくに」



4

5 万葉歌碑

片平町(山ノ井公園) 昭和9年
「安積山影さへ見ゆる山の井の 浅き心を我が思はなくに」

6 葛城王祀碑

片平町(王宮伊豆神社) 寛政5年
「奥安積郡安積山東片平山葛城王祀…」

その他の文学碑

7 出磬山碑

片平町出磬山 明治34年
安積開拓の指導者中條政恒の顕彰碑
「磐山雄勝 龍崎尤奇 甘棠蓬愛 龍能龍之
雲任神人 花臺斯治 寒露千歳 彷彿存茲
伊東義山の句も刻まれている
「此山にほひ残して花の雲」



7

8 伊東義山・子誠歌碑

片平町出磬山 大正4年
「たさかかる朝の露もほのみ嶺 たててそ祝ふ君かみいつを」
「大君の朝代の光はます鏡 めくみの朝のうつる静けさ」 子誠

9 高橋武次句碑

三穂田町鍋山(普賢寺) 平成5年
「世を丸く滅らし仏の使徒となる」

郡山文学マップ

3

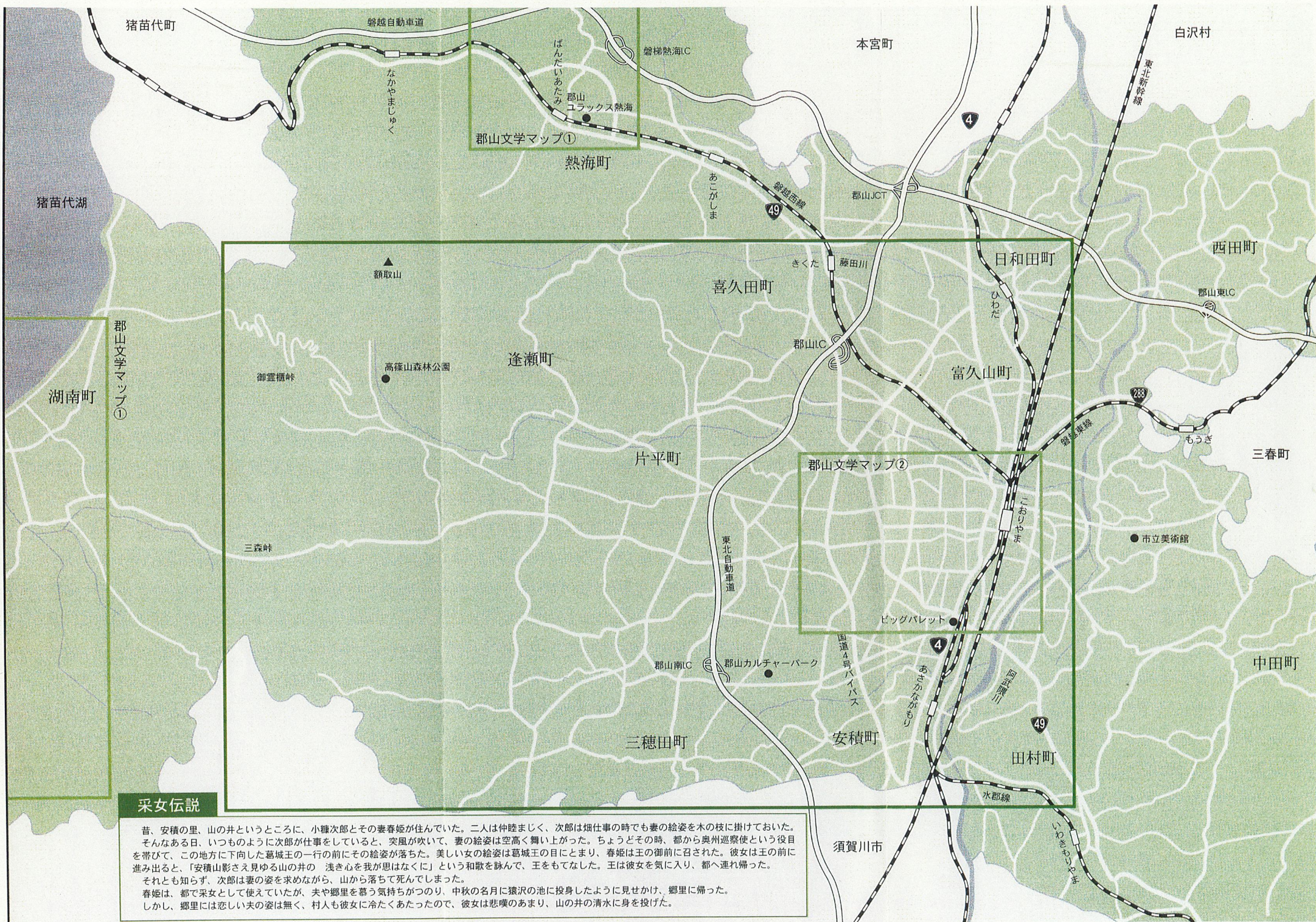
西部・南部編

—文学碑・文学者ゆかりの地—



こおりやま文学の森資料館

〒963-8016 福島県郡山市豊田町3番5号
TEL.024-991-7610 FAX.024-991-7620



采女伝説

昔、安積の里、山の井というところに、小糠次郎とその妻春姫が住んでいた。二人は仲睦まじく、次郎は畑仕事の時でも妻の絵姿を木の枝に掛けておいた。そんなある日、いつものように次郎が仕事をしていると、突風が吹いて、妻の絵姿は空高く舞い上がった。ちょうどその時、都から奥州巡察使という役目を帯びて、この地方に下向した葛城王の一行の前にその絵姿が落ちた。美しい女の絵姿は葛城王の目にとまり、春姫は王の御前に召された。彼女は王の前に進み出ると、「安積山影さえ見ゆる山の井の 浅き心を我が思はなくて」という和歌を詠んで、王をもてなした。王は彼女を気に入り、都へ連れ帰った。それとも知らず、次郎は妻の姿を求めながら、山から落ちて死んでしまった。春姫は、都で采女として使っていたが、夫や郷里を慕う気持ちがつり、中秋の名月に猿沢の池に投身したように見せかけ、郷里に帰った。しかし、郷里には恋しい夫の姿は無く、村人も彼女に冷たくあつたので、彼女は悲嘆のあまり、山の井の清水に身を投げた。